

# ダーウィン受容の一側面 — 藤村旧蔵書からの考察 —

高野純子

## 1. はじめに

現在、田山花袋記念文学館（群馬県館林市）に収蔵されている Charles Darwin, *The expression of the emotions in man and animals*, New York: D. Appleton and Company, 1899（館蔵番号：T31-N035, 【図版 1】～【図版 4】）は、扉【図版 1】に「藤」の蔵書印があり、同文学館「島崎藤村生誕 150 年記念企画展『藤村からの手紙』第 2 部（2022 年 6 月 8 日～8 月 14 日）において、花袋が所持していた藤村旧蔵の洋書として展示された書物である。この書物には青・赤・紫・黄緑の 4 色の色鉛筆による夥しいアンダーライン、サイドラインが施されている。例えば、表現の一般原理について記した Chap.III General principles of expression—concluded.の中の p. 68 【図版 2】では、前頁 (p. 67) I remember～ (p. 68) some persons に黄緑、As trembling～the muscles. に赤、The heart～次頁 (p. 69) under experiment に再び赤のアンダーラインが施され、(p. 68) The manner～their affection. に青のサイドラインが引かれているというように、多色の色鉛筆を用い、アンダーライン・サイドラインを併用した施線が行われている。また、人間の特殊な表情として【図版 3】のような図版も示しつ

つ、苦悩と涕泣を論述した Chap.VI Special expressions of man: suffering and weeping.の中の p. 155 【図版4】においては、前頁 (p. 154) の One melancholic～ (p. 155) induce weeping に青、Weeping is～ with cretins.に赤、Weeping seems～mental distress.に紫、But the ～the habit.に青、On the～through habit に赤、A single～次頁 (p. 156) copious crying に青のアンダーラインが施されているのが確認できる。

こうした施線は誰によるものなのか。青・赤・紫・黄緑の色分けには意味があるのか。この洋書は花袋や藤村にいかなる影響を及ぼしたのか。このような問題提起が可能になる資料であると考えられる。本稿は、その調査研究報告の端緒となるものである。

## 2. 田山花袋記念文学館収蔵資料調査より

『田山花袋記念文学館 収蔵資料目録Ⅲ コレクション目録』（平23・3 館林市教育委員会）において集計された《田山家受入資料!》に拠れば、収蔵された洋書の数は325点である。その中には、明らかに花袋によって書き入れが行われたと認められる書物がある。

英訳本である *Émile Zola Thérèse Raquin*, Chicago: Laird & Lee, Publishers, 1891 (館蔵番号: T31-No.210) は、その一例である。同書の扉には「花袋」の蔵書印と朱墨で「花袋」という自筆署名があり、本文の複数箇所には朱墨あるいは黒鉛筆による施線、書き入れが行われている。拙稿「『奇警』なる表現との出会い—花袋と *Thérèse Raquin* 英訳本」（「田山花袋記念文学

館研究紀要」平 28・3)において詳述したように、花袋旧蔵の *Thérèse Raquin* 英訳本において、例えば 20 章の書き入れである「奇警」の文字は朱墨でパラグラフ脇に縦書きで記されている。やはり朱墨によりアンダーラインを付された箇所は、テレーズがロランと再婚することが決まり、結婚式が執り行われる当日の一場面である。セーヌ河の小舟からカミーユを突き落とし、溺死させた(作品 11 章) ロランの首筋には、抵抗したカミーユによる噛み傷がまだ残っていた。着替えの時、カラーを取り付けようとして、その傷がすりむけ、苛立ったロランはカラーを丸めて投げ捨て、新しいカラーを取り付ける。この部分の本文に花袋は施線を単色で行っている。

同文学館収蔵資料の中には、藤村が花袋から貸借した洋書に施線、書き入れが認められる例もある。Dmitry Merejkowski *Tolstoi as Man and Artist* with an essay on Dostoïevski. Westminster: Archibald Constable & Co. Ltd., 1902 (館蔵番号: T31-No.117, 【図版 5】【図版 6】) の場合には、先行研究で小堀洋平氏が論述<sup>2</sup>しているように、最終頁 310 頁に、花袋の筆跡による「明治卅七年二月三日病中一過読」という墨書があり、施線、書き入れを行ったのは花袋であると考えられる。施線はアンダーライン、サイドライン双方が用いられているが、*The expression of the emotions in man and animals* (館蔵番号: T31-No.35) のように多色の色鉛筆を用いて施線を行う手法は用いられていない。【図版 6】は pp. 247-248 にかけてのサイドラインの一部分であるが、ドストエフスキの主人公たちを評したパラグラフに右斜めにサイドラインが引かれていることが判る。サイドラインの引き方も、異なっているのである。

このように複数の旧蔵書を比較していくと、*The expression of the emotions in man and animals* (館蔵番号：T31-No35) の施線は、花袋よりも藤村によって行われている可能性が高いものと推測される。だが、田山花袋記念文学館に所蔵されている書物で、同じく扉に「藤」の蔵書印があり、藤村から花袋が借りたと考えられている洋書 *Honoré de Balzac The Peasantry, translated by Ellen Marriage, New York: Macmillan and Co. Ltd., 1896* (館蔵番号：T31-No.219, 【図版7】) の場合には、施線、書き入れが施されていない。

藤村の旧蔵書への書き入れが書物によって異なることも予測され、複数の資料を閲覧するために日本近代文学館に特別資料閲覧を申し込み、ご許可を頂いて調査を行った。

### 3. 日本近代文学館蔵「島崎藤村資料」調査から

「日本近代文学館所蔵資料目録 13 島崎藤村資料目録」(昭 60・4 編集・発行 財団法人 日本近代文学館)の「旧蔵書」の項(p.6)には次のような説明が付されている。

藤村旧蔵書は和書、洋書に分け、それぞれ著者名の五十音順またはアルファベット順に排列した。同一著者名の中は、収蔵本の刊行年順とした。アンダーラインなどの書込みのあるものには\*印を、特に多い場合は\*印を書名の前につけた。

目録の洋書の内、\*印が付されているものは6点、\*印が付されているのは Tolstoi, Lev Nikolaevich *Anna Karénina*, translated by Nathan Haskell Dole, New York: Thomas Y. Crowell & Co., 1886 (特別資料番号 28 699 : 18, 【図版8】【図版9】) の1点のみである。

同書は、昭和43年5月20日、島崎静子氏によって寄贈されたもので「日本近代文学館 図書・資料委員会ニュース」No.1 (昭43・9・1 日本近代文学館 図書資料委員会) p.6「図書・資料受入れ報告 昭和四十三年四月～八月迄」に「※藤村未亡人島崎静子さんから藤村蔵書の洋書若干(書き入れあり)『藤村書誌』など図書三七冊いただく。」とある中の1冊である<sup>3</sup>。

この書物に関しては、日本近代文学館収蔵以前に、全篇の複写物を用いて分析を進めた、剣持武彦氏による研究<sup>4</sup>がある。剣持氏は施線の概要について、次のように記している<sup>5</sup>。

藤村はその所蔵本のドール訳に(以下ドール訳とのみ称する)「あか」「あお」「むらさき」「きみどり」の四種の色鉛筆をもってサイドラインおよびアンダーラインを施している。

『アンナ・カレーニナ』全八篇、二百三十九章のうち、藤村がサイドライン、アンダーラインを全く施していない章はわずかに第三篇、三章、四章、二十七章、二十八章、二十九章、第七篇二章、三章、六章、七章、八章、十七章の計十二章を数えるのみで、あとの二百二十七章にはどの頁にもほとんどびっしりとさきの四色による施線がされている。

更に剣持氏は多色の色鉛筆が用いられた事情として、

施線は特にどういう部分に引かれているかということは、上記したごとく、ほとんどの頁がアンダーライン、サイドラインで埋められているので判定がむづかしいが、四種の線「あか」「あお」「むらさき」「きみどり」が重なり合っていない点、前に読んだとき引かなかった部分をあとから埋めるように施線している点から少くとも四回は繰り返して読んだと思われる。色別では「あか」「あお」と「むらさき」がもっとも多く、それについて「あか」、以上三種にくらべて「きみどり」はずっと少ない。

のように、複数回にわたる読書の痕跡との見解を示している<sup>6</sup>。また「これは全くの推定だが、一番はじめの施線は「あか」でなされたのではあるまいか。『千曲川のスケッチ』に対応するような自然描写の部分では「あか」が目だつのである。」という最初の施線の色と自然描写との関係性も推論として示している<sup>7</sup>。

その後、日本近代文学館が所蔵する、藤村旧蔵書である *Anna Karénina* 英訳本を参照し『家』との関係を再検証した論考としては、小山ブリジッド「日本の明治期におけるトルストイの受容と影響—島崎藤村とトルストイの『アンナ・カレーニナ』—」（昭61・10「武蔵大学人文学会雑誌」）がある<sup>8</sup>。小山論では「若い夫婦の人生と、その運命」というテーマの共通性が指摘された。同論文に「島崎藤村の旧蔵書からトルストイ『アンナ・カレーニナ』巻末への書入れ」の画像が収録されている<sup>9</sup>が、施線の色分けについては言及がなされていない。

今回、近代文学館所蔵、藤村旧蔵書の *Anna Karénina* を調査した結果、必ずしも、赤のアンダーラインが『千曲川のスケッチ』に対応するような自然描写」と照応するとは言い切れない部分も散見することが判明した。そのことを、まず示していきたい。

【図版 8】 pp.18-19 には赤、紫、黄緑、青のアンダーライン、紫のサイドラインが施されているが、赤のアンダーラインは PART. I -IV の

① (前頁 p.17 At this moment one of the children in the next room be-より)

gan to cry, and Darya Aleksandrovna's face softened. She seemed to collect her thoughts for a second like a person who returns to reality; then as if remembering where she was, she hastened to the door.

② "Perhaps the chamber-maids heard her! horribly foolish ! horribly!"

そして、PART. I -V の

③ but he was lazy and idle,

の 3 箇所には引かれている。①はアンナの兄オブロンスキーが浮気したことに起

因する夫婦喧嘩のさなか、隣室で子供が泣き出したのに気付いた妻の表情がふと和らぎ (Darya Aleksandrovna's face softened.)、現実に戻った様子で急いで我が子の様子を見に行くところに施線がなされている。また、②はオブロンスキーが、妻ダーリアが金切声をあげたことを女中たちが聞いたり、馬鹿げている、ひどいものだど内心呟く部分である。そして、③はステパン・アルカージッチ・オブロンスキーのこれまでの経歴を遡り、努力するのを厭い、怠けがちであったことが示されている部分となる。

次にサイドライン、アンダーラインの施線に関して言及したい。pp.18-19 PART. I -IVの中で紫のサイドラインが施されているところは夫婦間ではなく、オブロンスキーと従者マトヴェイ、或いはダーリアとメイドとのやり取りが綴られている箇所である。それとは対照的に、紫、黄緑、青のアンダーラインが引かれた部分は、オブロンスキー、或いはダーリアの言動や思いが示されているところとなっている。

p.19の PART. I -V冒頭部分は③以外の施線が無い。オブロンスキーが生来優れた才能を有していたこと、或いは放縦な暮らしをしながらも、妹アンナの夫の力で俸給の良い名誉ある地位を手にしてきた経歴ではなく、怠けちな性情を示す部分に赤のアンダーラインが施されているところから、人物の性格、気性に対し、関心が寄せられていたものと見ることができる。

この他に、藤村旧蔵書の *Anna Karénina* の巻末には、藤村が作成した見出し一覧表【図版 9】が書き入れられている。本文の一部から見出し語を選び、作成したもので、剣持氏が次のように記述している<sup>10</sup>のものである。



藤村は『アンナ・カレーニナ』全八篇二百三十九章を、その篇(Part)と章(Chapter)とのあいだに、場の転換を基準にして、V (論者注：角枠は原文では丸枠) からけまでの三十一の部分にまとめた。そしてそのまとめの見出しとして、それぞれの部分の重要なことば、その部分を象徴するようなキーワードを以て見出しをつけている。(中略)

見出しの英文はすべてドール訳のなかにあることばで、藤村がアンダーラインをひいた部分から採られている。

藤村が英文を参照し抽出した「キーワード」は、見出しの一覧表<sup>11</sup>に紫色で記載されており、当該頁にも紫色の筆記体で「キーワード」が書き入れられている。章がローマ数字を用いて表記されている部分近くに算用数字を書き込む場合<sup>12</sup>には、赤もしくは青が用いられている。

PART. I-IVの中で、オブロンスキーと従者マトヴェイ、ダーリアとメイドとのやり取りが綴られている箇所の紫のサイドラインは夫婦間の問題とは少し離れるエピソード部分に施されており、見出し語に紫を用いて強調するような色分けとは別の基準でなされているものと思われる。

先述した通り、日本近代文学館に所蔵されている藤村旧蔵書の内、目録で書き込みが認められる\*印が付されている洋書が6点<sup>13</sup>ある。その書き込みは一樣ではない。

Rutter, Frank *El Greco (1541-1614)*, with 85 plates and 11 illus. in the text, London: Methuen, 1930 (特別資料番号 723:152) には赤、青、黒の鉛筆による下線が施されているが、*Anna Karénina* (特別

資料番号 28 699 : 18) と比較すると量的に多いとは言えない。青、黒の鉛筆による下線が施されている Nitobe, Inazo *Bushido; The soul of Japan; an exposition of Japanese thought, with an intro by William Elliot Griffis*. Tokyo: Kenkyusha, 1942. (特別資料番号 ニト:3) も同様である。Pascal, Blaise *Selected thoughts of Blaise Pascal* Translated and edited by Gertrude Burford Rawlings. London: Walter Scott, (n. d.) (特別資料番号 136:26) では、アンダーラインやサイドラインは用いられず、読点「、」に似た形状の黒い点が複数のパラグラフに付されていることが確認できる。

以上のことから、日本近代文学館蔵 *Anna Karénina* (特別資料番号 28 699 : 18) と田山花袋記念文学館蔵 *The expression of the emotions in man and animals* (館蔵番号 : T31-No.35) とは施線の手法に近似性が認められるといえる。

#### 4. 小諸時代の藤村

小諸時代 (明 32・4～明 38・4) の藤村が『種の起源』『人間と動物の表情』を興味深く読んだこと、またこの時期に「英訳で読める欧州大陸の小説や戯曲の類」として『アンナ・カレーニナ』などを愛読したことは「千曲川のスケッチ」奥書によって知ることができる。「千曲川のスケッチ」は小諸にて明 32～37 年の間に書かれた習作をもとに、改稿を加え、明 44・6～大 1・8 雑誌「中学世界」に連載、大 1・12 佐久良書房より刊行されたが、「奥書<sup>14</sup>」は昭 11・4

『定本版藤村文庫 第三篇 早春』「千曲川のスケッチ」収録の際、添えられたものである。

このわたしの前には次第に広い世界が展けて行つた。不自由な田舎教師の身には好い書物を手に入れることも容易ではなかつたが、長く心掛けるうちには願ひも叶ひ、それらの書物からも毎日のやうに新しいことを学んだ。わたしはダルキンが『種の起源』や『人間と動物の表情』なぞのさかんな自然研究の精神に動かされ、心理学者サレエの児童研究にも動かされた。その時になつて見ると、いつの間にかわたしの書架も面目を改め、近代の詩書がそこに並んでゐるばかりでなく、英訳で読める欧州大陸の小説や戯曲の類が一冊づゝ順にふえた。トルストイの『コサツクス』や『アンナ・カレニナ』、ドストイエフスキイの『罪と罰』に『シベリアの記』、フロオベルの『ボヴリイ夫人』、それにイブセンの『ジョン・ガブリエル・ボルクマン』はわたしの愛読書になった。

ここで言及されているダーウィンの『種の起源』に関しては、明治34年、藤村が師範学校生徒であった会津常治の計らいで長野師範学校所蔵の原書を借り、読んだことが、林勇『島崎藤村と小諸—詩より小説への歩み—』(昭45・8 竹沢書店) p.11、並木張『千曲川文庫 20 島崎藤村と小諸義塾』(平8・4 樫) p.51などに記されている。

かつて伊東一夫氏は『島崎藤村研究—近代文学研究方法の諸問題』(昭44・3 明治書院)の「第三編 西欧思想の受容研究の問題 二四、藤村の観察法とダ

ーウィン」において、

藤村における小諸時代の自然観の変革が、それ以前と比較していかに重要なものであるかは既に述べたところであるが、自然現象を観察する態度の真剣さと、そこに漲る真理追究の気魄の烈しさは、前後にその比をみることのできないほどのものであった。(中略)

第一は、いうまでもなくその態度が、写生派のもつ余裕派的、脱俗的なものではなく、科学的探究精神の烈しさにあった。写生画家も熱心な自然観察を行なっているが、藤村はそれ以上に徹底的であった。(中略)

第二は、そのような科学的精神を育んだものとして、ダーウィンの影響を指摘しなければならない。(中略)

このようにダーウィンの書を愛読し、これに心服しながら、藤村は本書のいかなる点を学んだかは具体的には説明していない

と述べている<sup>15</sup>。

田山花袋記念館蔵 *The expression of the emotions in man and animals* (館蔵番号：T31-No.35) は、伊東一夫氏が「ダーウィンの書を愛読し、これに心服しながら、藤村は本書のいかなる点を学んだかは具体的には説明していない」としている点を補完する書であるといえるのではないだろうか。『種の起源』が長野師範学校から借り出された原書で読まれていることから、藤村のダーウィン受容を考察する上で、その役割は重要であると考えられる。

5. 田山花袋記念文学館蔵 *The expression of the emotions in man and animals* (館蔵番号：T31-N<sub>o</sub>35)

田山花袋記念文学館に収蔵されている *The expression of the emotions in man and animals* (館蔵番号：T31-N<sub>o</sub>35) の表紙裏には丸善の書店票（朱色、東京／丸善株式会社／大坂）が貼付されている。明治 32 年 2 月以後に用いられたと考えられている書店票<sup>16</sup>である。

この書物は、以下の構成により、表現の一般原理を論述し、動物と人間の表情と感情を分析したものである。

## Contents

Introduction pp.1-26

Chap. I General principles of expression. pp.27-49

Chap. II General principles of expression—continued. pp.50-65

Chap. III General principles of expression—concluded. pp.66-82

Chap. IV Means of expression in animals. pp.83-114

Chap. V Special expressions of animals. pp.115-145

Chap. VI Special expressions of man: suffering and weeping.  
pp.146-175

Chap. VII Low Spirits, Anxiety, grief, dejection, despair.  
pp.176-195

Chap. VIII Joy, high spirits, love, tender feelings, devotion.  
pp.196-219

Chap. IX Reflection — meditation — ill — temper — sulkiness —  
determination. pp.220-236

Chap. X Hatred and anger. pp.237-252

Chap. XI Disdain — contempt — disgust — guilt — pride, etc.

Helplessness — patience — affirmation and negation. pp.253-277

Chap. XII Surprise — astonishment — fear — horror. pp.278-308

Chap. XIII Self-attention — shame — shyness — modesty: blushing.  
pp.309-346

Chap. XIV Concluding remarks and summary. pp.347-366

## 目次

- 第一章 表現の一般原理
- 第二章 表現の一般原理 (続き)
- 第三章 表現の一般原理 (完結)
- 第四章 動物の表現手段
- 第五章 動物の特殊な表情
- 第六章 人間の特殊な表情: 苦悩と涕泣
- 第七章 気鬱、不安、悲哀、落胆、絶望
- 第八章 喜悦、上機嫌、情愛、やさしさ、献身
- 第九章 反省—冥想—不機嫌—不平—決意
- 第十章 憎悪と憤怒  
侮慢—軽蔑—嫌悪—罪悪感—誇りなど

最初に施線が行われたのは Introduction p.10 第一パラグラフの *All the authors who have written on Expression,* から *for almost all the facial muscle* までの赤鉛筆によるサイドラインである。

その後、Introduction では p.12 から p.19 にかけて赤や青のアンダーラインが施されている。In the first place, to observe infants: (p.13,) に赤のアンダーラインが引かれ、次に続く *for they exhibit* から *some of our expressions "cease to have the pure and simple source from which they spring in infancy."* までに青のアンダーライン、次の In the second place, it occurred to me that the insane ought to be studied, (p.13) に赤のアンダーラインが引かれた後、*as they are liable to strongest passions, and give uncontrolled vent to them.* まで青のアンダーラインが引かれている事例が認められる。このことから、Introduction では赤のアンダーラインが「第一に乳児を観察することである」「第二に精神病者を研究する必要があると思いついた」といった箇所を明示する目的で引かれ、その後の説明に青のアンダーラインが引かれたものと見ることができる。

日本近代文学館蔵 *Anna Karénina* (特別資料番号 28 699 : 18) のような見出し表は書き入れられていないのだが、田山花袋記念館蔵 *The expression of the emotions in man and animals* (館蔵番号 : T31-No.35) では、あるアンダーラインが一種の見出しとなるような方法が採られたものと考えられる。先の事例では赤のアンダーラインが「第一」「第二」の事項の目印となっている。

この他に具体例、科学的解説を色分けし、施線を行っていると考えられる部分もある。【図版 2】の Chap.III General principles of expression—concluded.中の p. 68 の事例では、黄緑のアンダーラインが引かれた前頁(p. 67) **I remember**～ (p. 68) **some persons** が、ある情緒によって引き起こされる筋肉の震え (**the trembling of the muscles**) の事例として、一人の少年が初めて鳥を撃ち落とした時、喜びで手が震え、しばらく次の弾込めをすることができなかったという具体例、そして人によっては優れた音楽によって身震いが起こるといった別の例を挙げている部分となっている。

そして、赤のアンダーラインが施されている **As trembling**～**the muscles**.は神経系の働きが筋肉に作用して震えが起こることを説明している一節、**The heart**～次頁 (p. 69) **under experiment** は心臓が外部の刺激に極めて敏感であることを脳髄や神経の働きから解説している一節となっている。

青のサイドラインが引かれている **The manner**～**their affection**.は情緒によって食道や肝臓などが影響を受ける事例が挙げられている。感覚中枢が臓器に及ぼす影響を示す例であり、個人差についても記述されている箇所である。

以上の部分の色分けは、具体的事例の部分は黄緑、身体の各器官と脳髄、神経あるいは情緒との関連を科学的に説明している部分は赤、ないしは青という区別をして内容を理解しようとしたものと推測される。

また、【図版 4】の苦悩と涕泣を論述した Chap.VI Special expressions of man: suffering and weeping.中の p. 155 の事例において、青のアンダーラインが引かれた前頁 (p. 154) の **One melancholic**～ (p. 155) **induce weeping** は、精神疾患の患者が涕泣する場合、何かの原因がある場合と悲哀



の観念と無関係である場合を示している部分、赤のアンダーラインの **Weeping is~with cretins.**は、精神疾患の患者が言語能力を失った後に泣泣する場合があるが、クレチン症患者のような例外もあることを示している部分である。紫のアンダーラインが施された **Weeping seems~mental distress.**は、子供たちに見られるように、泣くことは極度の苦しみに至るまでの身体的痛みや精神的苦痛など、あらゆる種類の苦しみの主要かつ自然な表現であると述べている部分である。

これに続く青、赤のアンダーラインは、涕泣という行為への習慣の影響力を記述した箇所施されている。青のアンダーラインの **But the~the habit.**は、泣くことを抑制するための努力が頻繁に繰り返されることがあり、習性となって影響していくことに触れている部分で、赤のアンダーラインの **On the~through habit** は、これとは異なり、涕泣の能力が習慣によって高められることを述べている部分となっている。両者の対比を色分けで明示したものと考えられる。この後の **A single~次頁 (p. 156) copious crying** の青のアンダーラインが施されているのは、涕泣の能力を習慣によって高め、葬送の泣き女となる婦人の例など、様々な事例を取り上げている部分である。

以上のような施線も、具体例、科学的解説を分別しながら、施されたものと考えられる。必ずしも、赤が科学的解説というような規則性は認められず、挙げられている事例を幾つかに分類したり、習慣化の異なるケースを区別し、内容理解を深めていくために多色の色鉛筆が用いられているものと考えられる。

## 6. ダーウィン受容の一側面

昭和 30 年代に吉田精一氏は『自然主義の研究』上巻（昭 30・11 東京堂出版）において、

「テレーズ・ラカン」の序文で彼（論者注：ゾラ）は「私は体質を研究しようと思ふ。性格ではない。……自分の望みは何よりも科学的目的だ」と云った。彼はテエヌの思想からの影響と、プロスペル・リュカスの著「自然の遺伝方則」と（以上マルチノオ）、ダーウィンの進化論と（デファー）、更にクロード・ベルナルの「実験医学序説」とから彼の遺伝と環境を重視する小説の方法論を組み立てたのである。その結果が彼の「実験小説論」（Roman expérimental）となつたことは有名な事実である。

（中略）

文芸運動としての自然主義、乃至自然主義の理論といふ時はふつうゾラのそれをさす。

（中略）

さてこの自然主義概念は日本に於ては、早く鷗外、上田敏等が比較的正しくとらへたものだつたにかかはらず、三十年代に於ては却つて混乱を見る。これは一つには「自然主義」の「自然」といふことばに囚はれたのである。

と述べている<sup>17</sup>。ダーウィンの進化論が社会的に大きな影響を与え、遺伝と環境とを重視する思想が文芸思潮にも広まっていった事象、しかしながら自然主

義概念は日本の「自然主義」において、やがて混乱を見るようになったという見解は、文学史上の問題として繰り返し論じられてきた。

だが、溝口元氏が「学術の動向」（平 22・3）の「ダーウィン生誕 200 年—その歴史的・現代的意義」の特集に寄せた「日本におけるダーウィンの受容と影響」に記述しているように、ダーウィンの影響は多方面に及ぶものであった。本能、遺伝の問題は重要であるがそれ以外の分野、例えば「心理学と学校教育の場合」にはダーウィンの著作が「表情や発達の領域で言及された」のだという。『人及び動物の表情について』は比較心理学の分野で重視された文献であった<sup>18</sup>。

近藤裕樹氏が平 15・11「文化史学」に発表した「明治期におけるダーウィン進化論と『同情』概念の受容<sup>19</sup>」において『人間の由来』 *The descent of Man* (1871)を通して論証を進めているように、『種の起源』 *On the Origin of Species* (1859)以降に著されたダーウィンの著作も、日本の思想史に影響を与えてきた。『人間の由来』 *The descent of Man* (1871)は、元々『人および動物の表情について』 *The expression of the emotions in man and animals* (1872)に一章として含める予定であったが、書物として単独でまとめるのが望ましく思われ、前年に刊行されたものである<sup>20</sup>。

近藤裕樹氏は、

明治期における進化論の影響は、一般にスペンサー主義つまり社会ダーウィニズムが有力であるとされている。しかし「同情」という視点に立って

当時の評論などを見てみると、ダーウィン進化論が当時の日本知識人に色濃く影響を与えていたと考えられるのである。従って、「同情」をキーワードに、ダーウィンが影響を受けたイギリス連合主義心理学とも関連付けながらその概念規定を行い、更には明治期における受容にも考察論究していきたいと考えている。

と述べ<sup>21</sup>、加藤弘之や外山正一、井上円了らが評論を執筆していた『東洋学芸雑誌』のダーウィン進化論に関する評論と東京青年会がキリスト教の真理を明らかにすることを目的とした『六合雑誌』との比較を通して、ダーウィン進化論で説かれるところの sympathy 「同情」への関心度の差異を指摘している。『六合雑誌』の方が sympathy 「同情」への関心度が高かったというのである<sup>22</sup>。

『六合雑誌』第四三号に掲載された東京青年会一員の執筆による「社会ニ起レル人為淘汰ノ一大疑問ニ答フ」という評論は、加藤弘之「社会ニ起レル人為淘汰ノ一大疑問」に答える形で論じられており、興味深い（中略）更に、この後の文章においてダーウィン『人間の由来』の考察にも触れており、（中略）「同情」と道徳を明確に区別し、その相互において密なる連関性が存在するというダーウィンの学説は「卓見」であり「称賛」に値するとしている。

この「同情」概念に関しては、島崎藤村も「現時の小説に就いて」（明 40・8 「太陽」文芸欄）において、次のような見解を示している<sup>23</sup>。

同情は観察の眼を掩ふと言つて、ダルキンも嘆息した言葉が有るが、さういふ科学の大家には別に生物に対する広大なる同情があつて、始めてあれだけの研究が出来たのでは有るまいか。劇を観、小説を読んで、直に涙を催させるものは、局部の同情であるが、それに依つて人生の帰趣とか、運命とか、又は吾済の生活に侵入してくる外界の力とかいふものを味ふには、単に局部の同情では物足りない。(中略)そこで物を根本から観るには、積極消極の両面を同時に兼ね味ふやうな握力、感覚のある鏡のやうな眼、其他種々の能力も勿論必要には相違ないが、第一に広大なる同情が無ければならん、斯う自分は思つて居る。それがあつて始めて是の人生に味がある。

という内容で、「同情は観察の眼を掩ふ」と語るダーウィンであるが「さういふ科学の大家には別に生物に対する広大なる同情があつて、始めてあれだけの研究が出来たのでは有るまいか。」との見方を藤村は示している。そして更に劇や小説ジャンルの問題においても「物を根本から観る」ためには「第一に広大なる同情が無ければ」ならないと述べているのである。

この前年、藤村は「女は如何なるハヅミにて墮落するか」(「新古文林」明39・10)の中において「▲ダウインは、動物は虚心に観察することが出来るから、随つて其真相も判るが、人間の方は何うしても同情に蔽はれて、本当の観察をすることができないと言つて居ます。」と述べ<sup>24</sup>、その後、「其真相」を捉え難い事象に着目している。<女子の墮落>という雑誌の特集として設定された問題の枠組みを超え、絶えず動揺しつつある人生の「矛盾した内部の光景」をどう意

味づけるか、恐らくそこには幾多の意味が存在するはずだという見解を示すのである<sup>25</sup>。

▲思ふに人生は絶えず動揺しつゝあるものでせう。その矛盾した、不思議な内部の光景を究めやうとするものは、所謂墮落といふものゝうちに幾多の意味を発見するだらうと思ひます。恐らく斯ういふ問はさう容易く答へ得る性質のものでも有りますまい。いや、実際私は大きな問題と考へて居るのでありますから。

文学と科学との関係は、藤村、花袋らが関心を寄せていた問題であつた。花袋が「西花余香」(明治34・5・27「太平洋」)の中で「兎に角にこの二十世紀の初頭に於ては、空想と神秘思想とを合せたる自然主義の大に文壇の地歩を占むるは事実なるべく、ことにこの主義がニイチエの大箇人主義、ダーキンの自然学、ワグネルの音楽論によりて大に発展せられたこと亦争ふべからざるの事実なるべし。」と述べ<sup>26</sup>、後年『近代の小説』(大12・2 近代文明社)において二葉亭四迷とダーウィンについて回顧している<sup>27</sup>こと、また、藤村が「帝国大学の文科に就て」(明42・12「太陽」<sup>28</sup>)の中で、ダーウィンへの関心に触れ「翻つて近代の文芸を望んで見ると、科学の製品が芸術界に侵入して、或はバルザックのスターターとなり、或はゾラの作品となつて、横溢した思潮の人心を侵すに至つた有様は、目覚ましくも亦驚かるゝ許りであります。文学は科学の精神を入れない処ではない。」と述べていることから、その一端を窺うことができる。

先行研究においては吉田精一氏の論のように自然主義と「遺伝と環境」とい

う点が特に重視され、論じられてきた。だが、ダーウィンの影響は実際には多方面に及ぶものであり、本能、遺伝といった問題以外の、心理学と関連する領域にも作家の関心は及んでいたとみるべきではなかろうか。

本稿で辿ってきたように、藤村はダーウィン理論の「同情」概念にも関心を持ち、『種の起源』*On the Origin of Species* だけでなく、それ以降のダーウィンの著作である『人および動物の表情について』*The expression of the emotions in man and animals* を熟読し、花袋にその蔵書を手渡している。現在、田山花袋記念館に所蔵されている *The expression of the emotions in man and animals* (館蔵番号：T31-No35) は、その分析を通じて、表情と心理の文学表現という面への影響関係を検証していくことが可能になる書物であると考えられる<sup>29</sup>。

## 7. まとめ

本稿では、日本近代文学館に特別資料として収蔵されている *Anna Karénina* (特別資料番号 28 699 : 18) と田山花袋記念文学館蔵 *The expression of the emotions in man and animals* (館蔵番号：T31-No. 35) の調査研究を通じて、両者の施線の手法に近似性があることを指摘した。

「千曲川のスケッチ」奥書(『定本版藤村文庫 第三篇 早春』昭 11・4)に「ダルキンが『種の起源』や『人間と動物の表情』などのさかんな自然研究の精神に動かされ」と記されているにもかかわらず、これまでの研究においてはダーウィン受容に関して、『種の起源』の問題が議論の中心となってきたように

思われる。

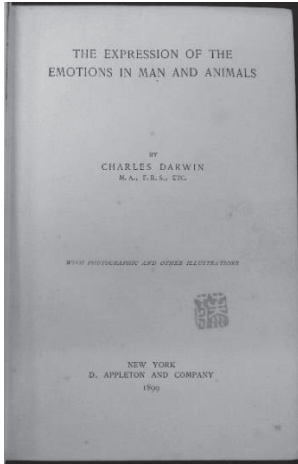
しかし、*Anna Karénina* (特別資料番号 28 699 : 18) p.18 で、アンナの義姉が我が子が泣き始めたことに気づき、ふと表情が和らぐという部分に赤のアンダーラインが施されたことに認められるような人物の表情と感情に関する文学表現への関心は、人間と動物の表情を科学的に分析した *The expression of the emotions in man and animals* (館蔵番号 : T31-No.35) の精読にも繋がるものだったのではないだろうか。今後、更に調査研究を重ね、追究していきたいと考えている。

※本稿の調査研究にあたり、貴重な資料の閲覧、画像利用の御許可を下さった日本近代文学館、田山花袋記念文学館 関係者の皆様に深く感謝申し上げます。

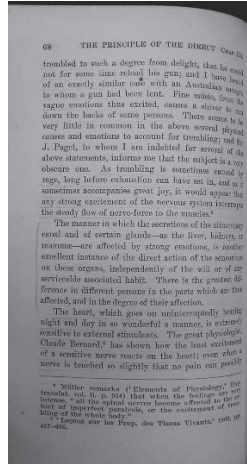
次頁以降の【図版 1】～【図版 7】は、田山花袋記念文学館所蔵資料(写真提供・館林市教育委員会)です。【図版 8】～【図版 9】は日本近代文学館所蔵資料です。



【図版 1】



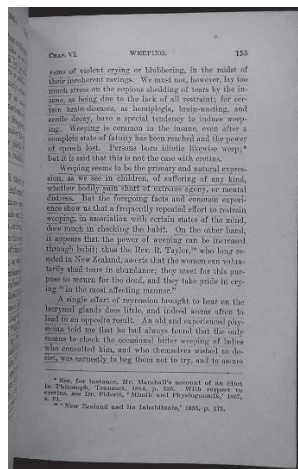
【図版 2】



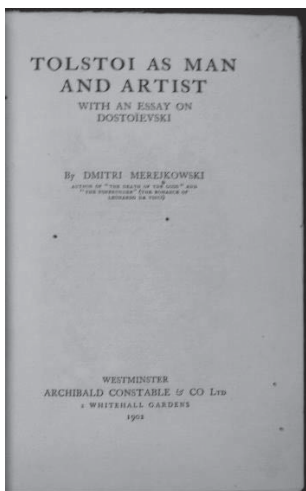
【図版 3】



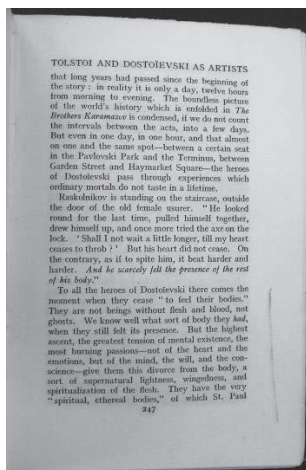
【図版 4】



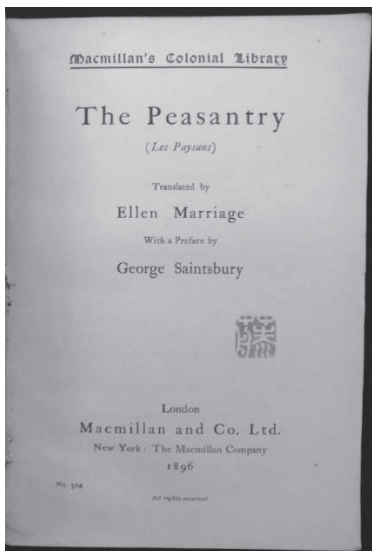
【図版 5】



【図版 6】



【図版 7】



以上、【図版 1】～【図版 7】

田山花袋記念文学館所蔵資料（写真提供 館林市教育委員会）



## 注

- 1 『田山花袋記念文学館 収蔵資料目録Ⅲ コレクション目録』 p.3
- 2 「以上の線引き箇所を検討に際して注意すべきは、本書にはこれらの他に、本文最終頁にあたる三一〇頁に、花袋の字で『明治卅七年二月三日病中一過読』という墨による書き込みがあることである。線引きと『一過読』の墨書は、一連の読書の過程においてなされたと見るのが自然であろう。」  
(小堀洋平「花袋・メレシコフスキイ・藤村ー『人および芸術家としてのトルストイ』の貸借をめぐる基礎資料ー」平 31・3「田山花袋記念文学館研究紀要」 pp.12-13)
- 3 昭和 43 年の蔵書寄贈以前にも、同年 3 月 7 日「日本近代文学館ニュース」第 10 号の第 3 面「小杉天外資料一括や有島武郎原稿・遺品など」の記事の中に「また先に島崎静子氏より藤村書簡百数十通が寄贈され、巷間的话题となったが、引続き藤村書簡・色紙・筆蹟・遺品などが贈られた」という受入の記録がある。
- 4 剣持武彦「トルストイ『アンナ・カレーニナ』と島崎藤村『家』」は「近代小説の一つの読み方——島崎藤村『家』とトルストイ『アンナ・カレーニナ』——」(昭 48・7「解釈」)を改訂し、笠間選書 28『キリスト教と文学』第三集 昭 50・4、『比較文学研究 島崎藤村』昭 53・11 朝日出版社ほかに収録された。
- 5 引用は朝日出版社 pp.206-207 に拠る。
- 6 同 pp.207-208
- 7 同 p.208
- 8 「武蔵大学人文学会雑誌」第 18 卷第 1 号 pp.112 (裏 p.1) - 93 (裏 p.20)
- 9 同 p.105 (裏 p.8)
- 10 朝日出版社 pp.209
- 11 見出し表は剣持氏の論考に翻刻されているが、原本との相違点が認められる。に (論者注：角枠は原文では丸枠)の頁数 3→93、はの「,」→「!」、ちの Life→life、のの T→To、けの the→見出し表にも p.741 にも記載なしという点で、複写物に基づき作成されたことが影響した可能性も考えられる。
- 12 章のローマ数字と同じ算用数字を書き入れるのではなく、作成した見出し表に基づき、見出し語で区切った場面ごとに算用数字を付している。
- 13 \*印が付されている洋書は

Brandes, Georg Morris Cohen. *Creative spirits of the nineteenth century*, translated by Rasmus B. Anderson, New York: Crowell, 1923,

Nitobe, Inazo *Reminiscences of childhood in the early days of modern Japan*, with intro and comments by Mary Patterson Elkinton Nitobe. Tokyo: Maruzen, 1934,

Nitobe, Inazo *Bushido; The soul of Japan; an exposition of Japanese thought*, with an intro by William Elliot Griffis. Tokyo: Kenkyusha, 1942,

Otto, Emil *French conversation-grammar; a new and practical method of learning the French language*. 10th ed., London : Nutt, 1888,

Pascal, Blaise *Selected thoughts of Blaise Pascal* Translated and edited by Gertrude Burford Rawlings. London: Walter Scott, (n. d.),  
Rutter, Frank *El Greco (1541-1614)*, with 85 plates and 11 illus. in the text, London: Methuen, 1930 の6点である。

<sup>14</sup> 引用は「千曲川のスケッチ」奥書（『定本版藤村文庫 第三篇 早春』昭 11・4）p.417に拠る。

<sup>15</sup> pp.239-241

<sup>16</sup> 佐々木靖章『夏目漱石 蔵書（洋書）の記録—東北大学所蔵「漱石文庫」に見る—』増訂改訂版（平20・3 てんとうふ）p.195で「朱色Ⅱ」に分類されている書店票。佐々木氏は「使用時期の確定は今のところ推測に頼るしかない」としながらも、「朱色Ⅰ」からの交替は大坂出張所が支店に昇格した明治32年2月以後との見方を示している。次の「紫色Ⅰ」の使用開始時期は明治39年あたり以降ではないかとされる。

<sup>17</sup> pp.235-236

<sup>18</sup> 「学会の動向」（平成22・3）p.52に拠る。溝口氏はここで大正期、昭和初期の文献を取り上げているが、明治期にダーウィンの表情理論に関して詳述した文献として、理学博士川村多実二（1883—1964）の講話「ダーウィンの情緒表出論」（明44・12・15「動物学雑誌」）pp.11-19がある。講話の中には「数多いチャールズ・ダーウィンの著述の中に、『人及び動物に於ける情緒の表出』と題する一冊があることは、何人も知る所である。」（p.11）との言説がある。

<sup>19</sup> 「文化史学」第59号 pp.90-124

<sup>20</sup> 浜中浜太郎「訳者序」（昭5・10に書かれた序文。岩波文庫『人及び動物の表情について』昭6・1に収録）

<sup>21</sup> 「文化史学」第59号 p.100より引用。

<sup>22</sup> 同 pp.115-117より引用。

<sup>23</sup> pp.147-148

<sup>24</sup> p.60

<sup>25</sup> 注 24 に同じ

<sup>26</sup> p.20

<sup>27</sup> pp.38-39

<sup>28</sup> 文芸欄 pp.139-141

<sup>29</sup> 近年の研究としては長谷川洋二「『共同研究』ダーウィンの表情理論研究—『人間と動物の表情』(第 14 章) 翻訳」(平 21・3「論叢 玉川大学文学部紀要」) pp.31-42、坂井妙子「赤面—チャールズ・ダーウィン『人及び動物の表情について』」(平 21・11「日本女子大学総合研究所紀要」) pp.189-205 がある。